

多様で貴重な生物群

価値ある鶴殿の自然

ヨシの仲間の見分け方



ヨシ(イネ科ヨシ属)
穂は黒っぽくフワフワ
葉は幅広く垂れる
茎はまっすぐで節間は長い



オギ(イネ科ススキ属) 荻
穂は真っ白でススキのよう 芯は金色
葉は細く中央に白い線 節が膨らむ



セイタカヨシ(イネ科ヨシ属)
背高 蘆 別名 西湖の蘆
穂は細く 葉は全て上を向く
節は多く 冬でも枯れない



オドリコソウ(シソ科) 踊子草

鶴殿だけの貴重な植物



絶滅 アゼオトギリ(オトギリソウ科)
畦弟切り 鶴殿で見られる



絶滅危惧I類

鶴殿で見られる大阪府レッドデータブックの植物群



トネハナヤスリ(ハナヤスリ科)
利根花鐘



イガクサ(カヤツリグサ科)
稗草



鶴殿の秘密

鶴殿のヨシは ウドノヨシと呼ばれ別種と想われていたほど 背が高く太いヨシが育つ秘密は 砂地の上に堆積した分厚いシルト層(肥沃な黒土) 地下0.5m~2mあたりに地下茎が発達 地上部をしっかり支えている

絶滅危惧II類



ノウルシ(トウダイグサ科)
野漆

準絶滅危惧



ハンゲショウ(ドクダミ科)
半化粧 半夏生



タヌキマメ(マメ科)
狸豆



フトイ(カヤツリグサ科)
太蘭



カワチシャ(ゴマノハグサ科)
川苔 環境省準絶滅危惧



ミソコウシュ(シソ科)
溝香需



ヒメナミキ(シソ科) 姫波来



ミコシガヤ(カヤツリグサ科)
御輿芽



サデクサ(タデ科) 摩草



ヤガミスゲ(カヤツリグサ科)



タコノアシ(ユキノシタ科)
蛸の足

鶴殿の不思議



小山 弘道
鶴殿ヨシ原研究所所長
植物生態学者

鶴殿のヨシは 古来から 雅楽楽器 筆染の蘆古に用いられ 今でも宮内庁 雅楽(国の重要無形文化財)を支えています
なぜ鶴殿のヨシが妙な音を奏でるのか明らかではありませんが 三川(木津川・宇治川・桂川)が長年にわたり 山地から運んできた堆積物で創った肥沃な河川敷に生育しているからでしょう

昭和12(1937)年 牧野富太郎博士も鶴殿を訪れ それまで別の植物とされていたものをヨシと改めるほど 他に異なっていたと記載されています 最高草丈568cm(2010年)

ヨシは日本特有の植物ではなく 温帯地域を中心に亜熱帯 亜寒帯に広く分布しています
その中で 鶴殿のヨシが日本の 世界の「音の文化」に重要な役を果たしてきたことは特筆すべきことです

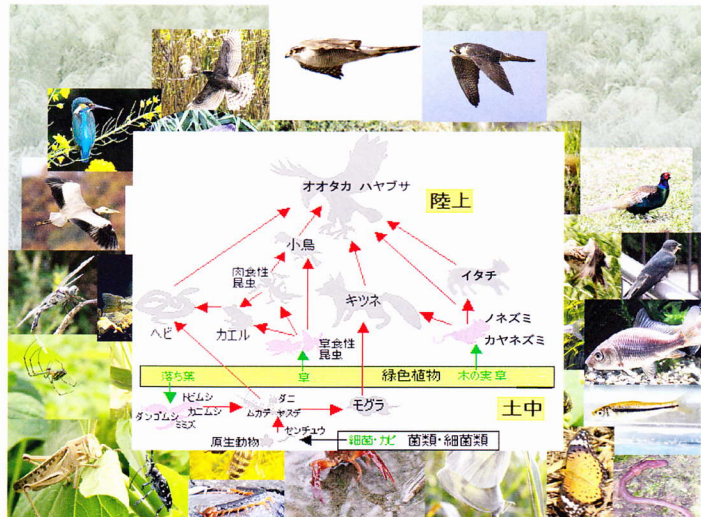
ほとんどが公園化 ゴルフ場化した淀川河川敷の中で「鶴殿のヨシ原」がなぜ多くの生き物が暮らすヨシ原として残りえたか 近年まで地元がヨシズ・スタシを作っていたからです



蘇ったサワトラノオ(サクラソウ科) 澤虎の尾

環境省絶滅危惧IB類のサワトラノオは全国でわずか400個体が確認されているだけ このままでは近い将来日本から絶滅するサワトラノオが鶴殿で36個体(2010年)確認されています これは 導水路工事により 地中にあった数十年前の種子が発芽したようです 鶴殿では工事による復活種がいくつか見られます





多様な昆虫



ツマクロヒョウモン♀(産卵中)



キタテハ♂



モンシロチョウ♂♀



ベニシジミ♀



キタテハの食料はヨシの天敵カナムグラ



クツワムシ♂ クツワムシの好物 クス(単食)



青柳 正人 (昆虫学者)

鶺鴒の多様な植物と昆虫
 鶺鴒=ヨシ原というイメージは強いが生物多様性から見るとヨシ以外に雑多な植物が混在しているのが望ましい。ここでは厄介者扱いの植物と共存する昆虫を紹介しよう。鶺鴒には普通に見られる蝶の中間のキタテハ。本種の幼虫は目の敵にされているカナムグラを専門に食べる。同じくツル植物のクスは、海外で侵略的外来種として大暴れの国際的な嫌われものである。このクスの茂みに棲息しているのがクツワムシ。唱歌の「虫のこえ」にも登場する有名な鳴く虫であるが、かつての「有名な虫」も、今や大阪府のレッドデータブックに掲載されるほど数が少なくなった。本種は鶺鴒に数多く棲息しているが、クスの葉を主食としている。生物多様性は生物同士の結びつきの多様さでもある。そうした結びつきを見ていくと、カナムグラもクスも生物多様性に貢献していることがわかる。人間は邪魔者扱いするが、生態系の中では邪魔者ではない。



シオカラトンボ♀



コアオハナムグリ



トノサマバッタ♀



ツコムシ♂



ヒメウラジャノメ♀



ヌートリア



クマ



シベリアイタチ



ヒバリ



アカギツネ



ハイタカ



オオタカ



ハヤブサ



ツバメ



キジ



アオサギ



カルガモ



クサガメ



アメリカザリガニ



トノサマガエル



渡辺茂樹 動物生態学者

鶺鴒ヨシ原イタチ生態調査
 西日本(木曾三川以西)のイタチはニホンイタチ *Mustela itatsi* とシベリアイタチ *Mustela sibirica* の2種であり、前者は山地、後者は平野(都市を含む)にすみわけ的に分布する。だが鶺鴒では、1980年代に2種が同所的に分布、1990年代の調査ではシベリアイタチのみで2010年は4/5/7月の3回にわたって農捕獲調査を行った結果は再びシベリアイタチのみであり、ニホンイタチは確認できなかった。ただ1980年代ならびに1990年代と異なり、今回は幼獣を捕獲できた。即ち、シベリアイタチが鶺鴒で繁殖もしていることを確認できた。
 本年のシベリアイタチの総捕獲頭数は6頭で成獣4(雄2・雌2) 幼獣2(雄のみ)である。密度は0.075頭/haだ。ただしこれはあくまで総捕獲数。各月の密度はもっと低い。4月は0.0375頭/ha 5月は0.125頭/ha 7月は0.025頭/haだ。けれど使用した罾の数が12と(調査面積の割には)少ないので、暴露されていない個体がながながしいことが想定される。この数字はあくまで最小値である。



シベリアイタチ♀ (チョウセンイタチ)

鶺鴒気象観測
 鎌田 忠彦
 元日本気象協会職員



広大な河川敷ヨシ原に分布している種々の植生が、どのような気象・水象環境下で年々生育しているのか、順次実施されるヨシ原の保全対策の結果を評価するためにも、年毎の生育環境の違いを定量的に把握する必要があるとの考えで、実際に河川敷内の複数ポイントに機器を設置して観測を開始したのが1998年5月中旬でした。

観測項目と地点数は気温・湿度・風向風速・地中温度・導水路水位/水温が1地点、地中温度のみが2地点、それに河川敷端の堤防沿いを流れている新川の水位1地点です。これとは別に、河川敷内の十数地点には、観測用井戸が設けられていて、自動水位計によりヨシ原のほぼ全域の地下水水位データが取得されています。また以前には、植生の生育条件で最も重要な土壌中の水分量は「土壌水分張力」として取得しています。これらの膨大な観測データは整理分析して、保全事業のための基礎資料となります。